

昆虫記（ファール・全10巻）から抜粋

1. 針の打ち方（3巻）

英国人ならローストビーフ、チュートン人ならキャベツの酢ズケとソーセージ。ロシヤ人ならキャビア、ナポリ人ならマカロニ、ピエモンの人達ならとうもろこしがゆだ。カルパントラス人ならチアヌだ。そしてトガリアナバチならバッタだ。このお国料理はまたアナバチのそれだ。

数ページ読み進むと、いけにえになるオガミカマキリは、トガリアナバチより比較的強力だ。メス3刺しですべての攻撃力に止めを刺さねばならないのだ。

最初の短刀の一撃を向けるのは、手術者自身に危険千万な鎖鎌の肢だ。前部に針の第一撃、1センチばかり下がって、ごく接近した二点に針の二撃、人の知識はこう語る。推理は解剖学的構造に導かれてそう忠告する。今度は虫の執刀順を見よう。

相手の螳螂は四本の歩行肢の上に体を突っ立て、来たらば来れと身構える。前半身を立てて、あの大鋏を開き、閉じまた開き、脅かすように敵に突きつける。

蜂はこの恐ろしい鎖鎌を避けて、背の方を飛びつづける。それから、螳螂がこの高速運動に参ったなと判断するといきなり相手の背にさっと降下する。頸を大顎でくわえ、前胸を肢で抱いて、鎖鎌の付け根に急いで針の第一撃を加える。うまい。命取りの大鋏はだらりと伸びる。すると手術者は帆柱かなんぞのようにするすると滑ってカマキリの背の上を後退りし、指幅一つ足らず下がって止まる。

この外科医は卵の為に仕事をしている。生かしておくが手向かいはずに子に食べられるようにと生餌を麻痺させて、全く動かぬようにしておかねばならない。

合目的的行動に感心する。

2. 「行列毛虫」（6巻）

彼らは各自、頭を前のものの尻につけて、続いた紐のように一列になって進んで行く。先頭に立って行く毛虫（隊長）が気まぐれにあちこちさまよいながら描く込み入った曲線を、他のすべでも丹念に描いている。エレウシスの祭りにおもむく古代のお祭り行列もこれほど整然としてはいなかった。そのために、行列虫という名前が、この松の葉をかじる虫に与えられた。

視覚と臭覚を除けると、巢への戻り道の道標に何が残っているか。道々紡いだ紐が残っている。

クレタ島のラビリントの中でテセウスはアリアドネから貰った糸玉がなかったら道からはぐれていたろう。松の針葉の広大な繁みは、とりわけ夜、ミノタロスのそれと同じように込み入ったラビリントだ。行列虫は絹の小網の助けでちっとも間違えずに道をたどる。

行列虫ではすべての隊長はその場その場の士官である。今の隊長は皆を率いている。もしも行列が何かのために遮断されてそして違った順序に作り直されたら、やがて彼は率えられるものになるだろう。

閉ざされた円を毛虫に描かせてみようと思いついた。

口の周囲が1メートル半ばかりの大きさの棕櫚鉢が幾つかある。毛虫はよくその壁面をよじ登り、口の蛇腹となっている縁のところまで上ってゆく。この場所は行列のために彼らの気に入っている。

1896年の1月、私は数多い一隊が上の方に歩いて行って、この気に入りの蛇腹に行き着き始めたところを見かけた。規則的な行列を作って進んでいる。その間にも他のものは引き続き前進し、その隊列を長くしている。私は紐が結び合わされるのを、言葉を変えて言うと環形の縁を、どこまでもたどりたどり歩いている隊伍の先達がその開始点まで戻ってくるのを待った。15分ばかり経つとそれが済んだ。円周に極めて近い閉鎖環走路は今実に見事に実現された。

切れ目のない環形の行列では、隊伍長はもう存在しない。

鉢の縁の最初の一巡りのときから、絹のレールは敷設された。やがてそれは行列隊が道に糸を絶えず吐くので、狭いリボンに替えられる。このレールは元のところに戻って、どこにも支線を持っていない。毛虫たちはこの閉ざされたまやかしの小路の上でどうするだろう、力が尽きて果てるまで限りもなくぐるぐるどうどうめぐりをしているのであろうか。昔スコラ学派はビュリダンのロバのことを我々に物語っている。この有名なロバは二つのカラスムギの樹の間におかれると、等しいそして正反対の方向の二つの欲望の平衡を破って彼方なり此方なりに心を定めかねて飢え死にするのである。これはこの立派な動物を馬鹿にしたことだ。他のものに劣らず馬鹿でないこのロバは両方の樹ともご馳走になって、論理の罫にざまみろと答えるであろう。私の毛虫連中もいくらかこの知恵を持っているであろうか。

走路（回周は1.35メートル）は、同一水平面に維持されずに2度屈折し、ある点では鉢の軒蛇腹の下に下り、もう少し先のほうで再び上のほうに現れている。だから、環走路のある部分は、行列は張り出した縁の下面を進む。そして、その逆さの位置は、始めから終わりまで、すべての毛虫が一回り毎に繰り返してやってのけたほどほとんど何の不便もなんの危険もないものである。

寒さが前触れ無しにやってきた。私は明け方にたずねてみた。彼らは前夜どおり縦隊をなしている。だが動いてはいない。暑さが幾らか戻ってくると、彼らは昏睡を払い落として元気になり行進を再び始める。どうどうめぐりの行列は私がこれまで見たと同じようにまた始まる。この機械の強情さには前日より以上の事も以下の事もない。

何時救いが来るのであろうか。ある伝説は、悪魔の呪いが一滴の聖水によってとかれるまでと

めどもなく円舞の中に引き込まれている哀れな魂のことを語っている。よきチャンスはどんな滴を私の行列に投げてその環を解き、巢に連れ戻すであろうか。私はこの運命を祓い、環走路から開放されるたった二つの手段しか見ない、この二つの手段は二つの苦しい試練である。ものの因果は奇妙なつながりを持っている。苦痛から、悲惨から、善が生まれてくることになっているのだ。

ひと口に言うと、行列虫の難渋の列車を何とかするには、我々の行列とは逆に脱線しなければならないのである。道から外へ出るということは、右なり左なりに道を変えられる唯一のもの、行進隊長の心持ちしただい。そしてこの行進隊長は環が断ち切れない限り絶対に存在しないのだ。で要するに最後に唯一の幸運なチャンスである環列の中断は、ごたごたした一つの進行中止から生まれてくる。その原因は主に疲労あるいは寒気がひどいということである。

24時間の7倍、その間だけ毛虫は鉢の縁に止まっていた。経験と反省、それは彼らの世界には存在しない。半キロメートルの行程、三、四百回のどうどうめぐりの試練も彼らには何も教えない。そして、彼らを巢に連れ戻すには偶発的の条件が必要なのだ。もしも夜のキャンプとそれから疲労によって起こる行進中止のための混乱が、幾つかの糸を環形道路の外に投げかけなかったら、彼らはリボンの罫の上で倒れたであろう。目的もなく置かれたこの側道へのいとぐちを通して、幾匹かは側に遠ざかり、やや迷い歩いて、そして彼らの道迷いから降り口が準備され、偶然に恵まれた短い数珠によってやっと果たされる。今日、名誉の位置にある学派、ずっと下った動物の中に理性の源を見つけたがっているあの学派に、私は松の行列毛虫はいかがと申し入れる。

(ファーブルの昆虫記第6巻 364-383頁)

3. ポプラの葉を巻く(7巻)

ポプラの葉を巻くどろちょっきり、形こそ小さいが、すばらしい身なりをした虫である。その背には金と銅との輝き、その腹には藍の青色をつけている。奴の働きぶりを見たかったら、五月の終わり、野原の端にある普通のポプラ、黒楊の下枝に一寸目をやれば良い。

彼の仕事ぶりを拝見しよう。巻く葉は幹の根元から束になって出てくる今年萌えの上に選ばれる。それはもう一人前の緑色になった組織の固まった下葉ではない。また上の端の方の大きくなりつつある葉でもない。上の方では若すぎて広さが足りない。下の方では古すぎて扱うのに骨が折れすぎる。

選ばれた葉はその中間のものだ。まだ緑の色も定まらず、黄色が勝ち、それに柔らかくてワニスの艶を持ち、大きさも大体育ちきったものと変わらない。

今道具立てについて一言いっておこう。肢先は天秤の鉤型の二重の鉤で武装されている。付節の下面は白い剛毛の厚いブラシだ。この履物をはいて虫はこの上もなく滑りやすい垂直の壁だとしてとても敏捷に攀じ登る。彼は背を下にして丁度ガラスの被いの天井にいる蠅のように止まった

り歩いたりする。嘴は彎曲した丈夫な吻で、先の方はへらのように平たく、端は細い鋏となっている。これは見事な千枚通しだ。

事実、葉はそのままでは巻けない。これは生きた薄板だ、樹液の流入、組織の張りのため虫が巻こうと懸命になっても、もとの平たい形に戻る。この小人虫は葉に生命の弾力ある限りこんな品物を自由に扱って、それを巻くだけの力を持ち合わせていない。

どうしたら良いだろうか？

我々はこう考える。「葉を枝から切り離せ、地面に落とせ、それが適度にしなびたとき、地面の上で仕事をしろ」と。

地面の上は邪魔な芝草で一杯です、私の仕事はとてもやれません。肘のつかえない場所が入用です。何一つ邪魔のない宙にぶら下がってやる必要があるのです。

すっかり枯死させてしまわず枯れかけながら、幼虫の孵り立てしばらくの間、その場所についているようにしておく必要があるのです。」

葉選みがすむ、と、母虫は、葉の根の上に陣取る。そこでこつこつ嘴を差し込み、丹念にぐるぐるまわす。この事は錐揉み仕事のごく大切なことを表示している。小さな傷口がかなり深くあく、やがてこれはぼつんと膨らんだ点になる。

これで済んだ。樹液の水路は断ち切られた。葉にはわずかばかりの浸み液しかとどかない。傷のところから葉は自重でだらりと垂れる。それは垂直に垂れ、すこしくしなびて間もなく所要のしなやかさになる。

この錐の細工は、生餌あさりの蜂類の剣の細工に似ている。蜂は子供のために時には死んだ、時には麻痺させた生餌を欲しがる。彼は解剖学の大家の正確さで、即死させるには、あるいは運動力を中止させるには、針を何処の点に刺したら良いかということを弁えている。

どろちょっきは、子のためにらくに巻型のつけられるしなやかな葉、いわば麻痺させた半死の葉を欲しがる。後はこの上もなく細索、すなわち葉にエネルギーを配る葉脈が細い束に集まっている葉柄を知っている。彼がその錐を押し込むのは、そこ、いつもそこだけで、決してほかのところには刺さない。一刺しちょいとやってそれで水路の破壊はこのように成就する。一体何処でこのとんがり鼻の虫は泉をからすこのすばやい仕事を覚えたのか。

葉は垂れ下がっている、葉片の表でも裏でも同じに手をつけられるが、しかしこの虫は表に陣取ることを忘れない、これにはこの虫が力学の法則に教わった彼の理由がある。品物の表面は滑らかで曲げるのに抵抗が少ない。それでまき葉の内側になる。太い葉脈のためもっと抵抗の強い裏は外側をしむべきである。脳みその少ない象鼻虫の静力学は学者のそれと一致している。

4. はしばみのしぎぞうむし (7巻)

若い丈夫な臼齒で、はしばみの実をがりっと壊す時何か苦いねばねばしたものを嚙まなかったであろうか。ペッー、ペッー！ はしばみの蛆だ。はしばみは一枚板でその樽を作る。このしぎぞう虫の幼虫は、どうしてこの要塞の中に入れたのか。表面は大理石を磨いたように滑らかだ。眼で調べても、外から来た害虫の入ったことを証明できるようなものはなにひとつも見つからない。はしばみの実こそっくりなのに、中に奇妙な中身を見つけた人はどんなに驚いたことか。この太った虫は意地悪のお月様の力で、はしばみの実から生まれたのだ。昔からの信仰を忠実に伝える百姓は、今日でも、この蝕いのはしばみやそれから虫の食った他の木の実を、お月様とそこを通った悪い風のせいにする。

はしばみの象鼻虫は口に錐を持っている。遅い早いはあるとしても、錐ははしばみの実の底に降りてゆく。この井戸の底に卵を産みつける。

8月のはじめ、その鑿である大顎の先で厚い壁を掘って、出てくる。予行診断もなく探り孔の試しほりもなく、蟄居の虫は自分の牢屋の弱点を心得ている。彼は成功を信じてそこをうんうん掘り出す。試掘なんかに暇をつぶさずに最初鶴嘴を打ち込んだところに、第2、第3と鶴嘴が打ち込まれる。初一念を守ることは弱者の力である。幼虫は針金伸ばしの仕事をやって、自由の身になるのだ。直径のより小さい穴を通して出てくる真鍮のように身を細くしながら殻の天窓を越える。

出口の孔は正確に頭の広さを持っている。頭は角質の兜をかぶって堅いので、形をくずしようはない。脱出が成功したとき、こんな小さな孔からよくこんな大きな円筒、こんなにも太った虫が出てこられたものだとびっくりさせられる。はしばみの内部では一体どんなことが起こっているのか。この虫の血は後部から頭部に流れ寄ってくる。生体の体液は移行し、すでに外に出てきた部分に集中してこれをふくらませ、頭の直径の5、6倍になるまで水腫症患者のように膨れ上がるのだ。

井戸の縁の上に、こんなふうにして太い肉の固まり、力帯ができあがる、それは膨張によって、またそれ自身の力によって、だんだんと後ろの方から、体液が移ってきたので大きさがそれだけ減じている体節を引き出すのだ。

5. あわふきむし (7巻)

卵の白味を泡立たせるのに我々は二つの方法を持っている。かき回す方法、すなわち粘り気のある分泌物を細かな部分に分けて、その玉の膜の中に空気を入れる方法と、吹き泡、すなわち、

この塊の泡一つ毎に空気を吹き込む方法だ。この2方法のうち、あわふきむしが仕事に使うのは、騒々しくなく、もっと趣のある後者だ。彼は息で泡を膨らますのだ。

だがどうして膨らませるのか、虫は肺のような空気の貯蔵機械を持っていない。どうもそれはできないように思われる。気管で息を吸って、それをふいごがわりに働かせることはできない動作だ。

それはごもつとも。が、虫が技芸を実行するのに、空気の一吹きが入用ならば、実に思い付きのうまい泡吹き機械がきつとある筈だ。この機械をあわふきむしは腹の端、腸の末端に持っている。そこにY字型に深く裂けたふくろが交互に開いたり閉じたりして、その二つの縁が合わさると、完全に閉じるようになっている。

これだけいっておいて、一つ仕事をりを拝見しよう。虫は樹液に浸かっている腹の先を持ち上げる。ふくろは開いて空気を吸い込み、これを満たして閉じ、十分に膨らまして樹液の中に浸す。そこでこの装置に収縮が行なわれる。捕らえた空気は管から出るようにほどばしり出て、最初の泡だまを作る。とみると、すぐ空気取りのふくろは樹液の上に持ち上げられ、口を開いて、再び空気を仕込み、閉ざしてもとの場所に下り、再び樹液の中に浸ってその空気を吹き込む。そして新しいシャボン玉ができる。

クロノメーターの正確さを以って、秒一秒とあわふき器械はこのように下から上に上がって、その弁を開き、空気を満たし、それから下に下りて樹液の中に浸り、そこで中の空気を放出する。

神神から慈しまれていたオデュセウスは、嵐を配給する神アイオロスから、風を閉じ込めた皮ぶくろを貰ったものだった。でしゃばりの水夫が中に何があるのか見てやろうと皮ぶくろを開いたので、嵐が飛び出して船を沈めた。この風で膨らんだ神話の風ぶくろを、私は若い時見たことがある。

イタリアのカラブリア地方から来た旅の鋳掛け屋が、二つの石の間になるつぼを作り、そこで錫のスープ皿や皿を鋳直しにいつもやってきていた。アイオロスがふいごを吹いた。アイオロスというのはしゃがんで右と左に山羊の皮でできた二つの袋をかわりばんこに押して火に風を送る。日焼けのした少年労働者であった。歴史以前の昔、銅を溶かしていた人々は、こんな風にやっていたに違いない。家の近くの丘にも、その頃の仕事場や銅滓が見られる。この人たちはその炉を皮ぶくろのふいごでおこしていたのだ。

私のアイオロスの器械はいたって単純なものだ。まだ毛のついている山羊の生皮がその役目をしている。この袋は下方は通気間に括り付けられ、上の方は開いてそこには弁の代わりに2枚の小板が取り付けられ、それが合うと閉ざされる。この二つの固い弁は、各々皮の取っ手がついていて、その一つは拇指、もひとつは残りの4本の指がはまるようになっている。

のべつに吹き続けるのは、小さな泡に空気を詰めなければならぬ時には、かえって不利な条件である。この点を除けば、あわふきむしのふいごは、カラブリア生れの鋳掛け屋のふいご式に動く。これはしなやかな袋だ。その固い弁は閉塞自在で、空気を入れるためには開かれ、それを捕

らえるために閉ざされる。内壁の収縮があので皮ぶくろを押す働きに代わって、その袋が樹液の中に浸った時、中の空気をふいごの息口にするのだ。

アイオロスの神話が語っているように、袋の中に風を閉じ込めようと思いついた最初の間は、確かに恵まれたインスピレーションを持っていたのだ。ふいごになった山羊の皮は道具を作る最上の材料、金属を我々にもたらしたのだ。

6. ワタムシ (8巻)

生物学を履修していない医学部生がいるというのに刺激されたわけではないが、ファーブルの昆虫記を読み続けて、ここで出会ったのがヒメハナバチである。

ヒメハナバチは1年に2度繁殖する。1度は春、秋に授精されて冬を送った母虫から生まれたものだ。もう1度は夏、これは処女生殖の、というのは母の力だけで生んだ卵だ。雌雄の協力からは雌しか生まれない。処女生殖からは雌と雄が生まれる。

雌雄の解きがたい問題に誰よりもよく通じているワタムシに問い合わせてみよう。

テレビントのワタムシ・虫・p180-201：小枝の先にひとつまたは群れになって振れた角が立っている。唐辛子の熟れたときのサンゴ色バラ色がかかった麦藁色にした、といったら、かなりうまい形容だ。そのほか果樹園の杏よりもっとみずみずしく、もっとすべすべした杏のまがい物が葉にぶら下がっている。〔これが虫・である。レトルトもこれである。〕外見に騙されて、このまやかしの作り物をあけてみる。うわあ！ 中身はメリケン粉みたいな粉の真中にうようよしている幾千ものワタムシだ。

テレビントのワタムシ・移住p202-215：テレビントのワタムシ・交尾・卵p216-225：ワタムシを食う虫たちp226-246を繰り返して読んだが、ワタムシの内容が掴めないばかりか、私にはだんだんこの虫が不思議な虫になってきた。図鑑を見ようと図書館に行く。原名をpuceronというらしいが昆虫図鑑で見当たらない。別名アブラムシ（蚜虫）という。フランス語でles puceronと書いてあるからこれだろう。アブラムシの生態は複雑なもので、ある種類の型と単性および有性生殖を行い、宿主の交代や、気象条件により、生活史の様式の差異等がある。

1) 幹母 2) 幹雌 3) 移住型 4) 被讓型 5) 産性虫 6) 有性型 について記述あり。ファーブルの記述は6) 有性型が該当すると思われるが、も1度p180-225を、読み直すのも面倒なので、一気にワタムシの終わりまで進むとこうなる。

この辺でお終いにしよう。そして結論としてこういっておこう。

食物の調査所ではワタムシが最初の調剤者だ。原子のこの蓄積者はその辛抱強い針で、岩が植物に提供した幾分手の加わった成分を取り出す。その丸いレトルトの中で、彼は貧しい粥を洗練し、それをもっと優れた栄養物である肉に変える。彼はその産物を無数の消費者に譲って、後者

はそれをだんだんとより高い種類のものに伝えていく。そして最後にその移住の環は閉ざされ、一般的な堆積物の中に戻される。これは生活し終わったものの廃物であり、これから生活すべきものの素材である。

最初の時期のこの遊星の上で岩を耕す一本の木、その植物を利用する一匹のワタムシを認めよう。それで沢山だ。生命の錬金術は生まれたのだ。高いランクにある動物はこれで生存できる。昆虫と鳥類とはやってきても大丈夫、彼らのご馳走の並んだ宴会を見出すだろう。

19世紀の末ファールブルの考えていた事から、世の中が余り進化してきたとは思われないのは私だけの偏見だろうか。

根原の生殖着である母が初め補佐人なしで済ませ得たのに、何故後になってそんなものが入用になるのか、あのちっぽけな遊びやなんか、なんで手を出すのだ。彼は不必要だ。どうしたわけで今雄が必要になってくるのか。この問いに対してわれわれはいつか満足な説明を持つであろうか。それは疑わしい。うまく結論づける希望はないが、聖地の巡礼たちはソドムの近くの灌木の上に、見かけは美しいが灰の一杯詰まったりんごが採集される、と報告している。テレピントの美しい杏や角形の唐辛子がソドムのりんごなのだ。美しい包みの中にこれまた灰、粉のようにうごめいている生き物の灰だけしか含んでいない。これは夥しいワタムシの家族が、外から隔離されて暮らしている増殖物の虫だ。

7. 所 有 権 (こがねぐも類・9巻)

一匹の犬が骨を見つけた。日蔭に腹這いになって、犬はその骨を前肢の間に押え、舌なめずりしながら飽かず眺めている。これは他人が手を触れることを許されない犬の財産、その所有物だ。一匹のこがねぐもが網を織った。これもまた一つの所有物。しかも前者よりももっと本当の意味での所有物である。犬は運と嗅覚に助けられて、ふところもいためず、手間もかけずに、ただ拾いものをしてだけのことだ。くもは偶然の所有者以上のもの、その財産の作り主だ、くもは材料を腹から出し、その構造を自分の技能から引き出したのだ。世の中に神聖な所有物があれば、この網こそまさにそれだ。

思想を集める者の仕事はこれよりずっと上だ。彼は別種のくもの網とも言える書物を編み、その思想で我々を教え、我々を感動させ得るものを作るのだ、我々人間の間では犬のこの骨に類するものを保護するのに、特にこの目的のために案出された憲兵を持っている。書物を保護するためには、我々は笑い物の手段しか持っていない。漆喰で幾つかの石を一つずつ積み上げる。すると法律はこの壁を保護してくれる。ペンで我々の思索の建物を建築してみる。すると大した障害もなく、各人はそこの切石をとり出し、気が向けば全体を自分のものにすることもたやすく出来る。兎の穴は所有物で、思索の産物はそうではない。もし動物が他人の財産に手出をする悪いく

せを持っているとすれば、我々人間もまた同じ悪癖を持っている。

強者の道理が一番の道理だと我国の寓話作者が言って、平和主義者の大憤慨をまき起した。詩句、韻律、脚韻の必要から、この人の好いラ・フォンテーヌは心に抱いている考えをはるかに飛び越えてしまったのだろう。彼は犬の間の喧嘩やその他野獣の間の争いでは、強いものがいつも骨の持主になると言いたかったのだ。彼はこの世の中では成功が優れていることの証明でないことをよく知っていた。人類に対して明らかに害を及ぼす他のものがとび出して来て、野蛮な言葉で掟を作った。力は法に勝ると。

我々は、皮膚の色を次第に変える幼虫、一つの社会のみすぼらしい毛虫で、ゆっくり実にゆっくりと力に勝る法の世の中をめがけて進みつつあるのだった。この嵩高な変態は行われるだろうか。我々が野獣の獣性から解放されるには、南半球に集っているオセアニア諸島が、ヨーロッパの力に流れて来、大陸の表面が変り、トナカイ及びマンモスの氷河期が再び来るのを待たねばならないのだろうか。事によるとそうかもしれない。道徳上の進歩と言うものは、それほどおそいものだ。

我々は成るほど自転車、自動車、航空機その他我々の骨を打ちくたく驚くべき手段を持っている。だが、こんなものはすべての道徳を一段だって上げてくれはしない。道徳は我々が物質の奴隷になればなるだけ、段々と退歩するとさえ言っている。我々の発明のうち一番進んだものは収獲をする百姓が麦を刈るのと同じ速さで、機関銃と爆弾で人々をなぎ倒すことだ。

8. 数学の思い出 (9巻)

今日は私はすばらしい問題、ケプラーの3法則を征服することになっている。この法則は計算によって探求され、天体の根本運動を私に見せてくれるはずだ。その第1法則はいう。一惑星動径によって記される面積は経過時間に正比例する。私はそこから惑星をその軌道の上に維持する力が、太陽の方向に向けられているという結論を引き出さねばならない。微分方程式と積分とに徐々に促されて、すでに公式はものを言っている。私の瞑想は倍加され、私の思想は心理の花がすべての美しさで開くところを捉えるために拍子をつけている。

突然、遠くでブルルルーン、ブルルルーン、ブルルルーン…！ それは近づいてくる。それは大きくなってくる。因ったことだ！ 畜生、「中国旗」事のてんまつを説明しよう。私は町の騒々しさをはなれベルン街道の入口に当る町はずれに住んでいた。私の住居から十歩ばかり離れた筋向いに、最近「中国の旗」と言う看板をかかげた酒場が開かれた。そこに日曜日の午後、近くの農家の娘や若者が集まって来て、体を伸び縮みさせて四人組のカドリールを踊るのだ、客寄せのために、そして清涼飲料水を余計飲んでもらうためダンス会の企画者は天主の日の跳ね踊りの後に福引きを添えた。

二時間もまえから彼は共同遊歩場に笛と太鼓を先頭にして、景品を見せてまわっている。紅い毛織の帯のたくましい若者がリボンをつけた棒を持ち、その上には、銀色の湯呑みやりヨン製の絹ハンカチや一對の蠟燭や葉巻の束がぶら下っている。こんな餌をつきつけられては誰がこの酒場に行かずにいられよう。

ブルルルーン、ブルルルーン、ブルルルーン！ と行列は音を立てる。それは窓の下に来て、右の方に斜めに行き、つげで飾られた広いバラック建ての家に入ってゆく。騒ぎが厭なら、いまうんと遠くへ逃げ出さねばならない。夜が閉ざすまで、ラッパはわめき立て、木笛は吹きならされ、号笛はひびき渡るのである。こんなカフィール人の合奏の中で、ケプラーの法則の結果を引き出そうなどしたら、それこそ間違いになってしまう。大至急で逃げだそう。

私は二キロメーエばかり離れたところに、のびたきやばったの大好きな小石まじりの荒地を知っている。そこは完全に静かだ。そしておまけにけちくさい蔭を借してくれるであろうひろはうばめがしの茂みがいくつかある。私は本と紙二三枚と鉛筆一本とを持って、この閑静な場所へ急いだ。何とすばらしい静けさと、この上もない穏かさだろう。だが、太陽は茂みのわずかばかりの日蔭では焼けつくようだ。元気でいけ、若い者よ。あおばねばったを友として、ケプラーの法則に歟を入れるんだ。お前は計算を解いて戻るが肌は焦げるぞ。首筋の日焦けは面積の法則を理解したおかげだ。これであれが償われると言うものだ。

そのほか週日には、私は木曜を持っている。私はこの日の晩を、眠りにうちのめされるまで勉強していた。学校に縛られてはいたが、要するに、時間がないことはなかった。大事なことは、とっつきにさけられない難解な箇所でも落胆しないことだ。私はかつらの生いかぶさった密林によく迷い込む、光を通すには、それを斧で倒さなければならない。運よく幾つかの抜け路を通して本道に戻る。また道に迷う。ねばり強い斧はいつも満足な光を通してくれるとはかざらないが、抜け道を作ってくれる。

本は本でしかない。言いかえれば、一律に簡潔な文章で非常に博学なことは私も認めるが、残念なことにわかりにくい場合が非常に多い。著者はまるで自分のために本を書いたようだ。著者はわかっている。だから他人もわかる筈だ。独学のあわれな入門者たちよ、君たちはなんとかしてそこから抜け出ることだ。

君たちには、そのむずかしさを違った角度から見せる戻り道はなく、けわしい路を歩きやすくして近づけるよう準備する迂回路もなく、光が少し差し込む補助窓もない。本は言葉のようにほかの攻撃方法でやり直すこともできるし、光の方に近づく道を変えられるものにくらべれば、ずっと劣ったもので、言ったことだけしか言ってくれず、それだけだ。

証明が終われば、皆分かが分かるまいが、ご神託は無慈悲に黙りこくっている。君たちはその文章を繰り返して読み、根気よく考えてみる。計算の糸の目の間に杼を通したり、戻したりしてみる。こんな努力は一向に効き目がなく、難点は依然として残っている。多くの場合明るく照らすためには、どうしたらよいのだろうか。一つのなんでもないこと、簡単な一語に尽きる。そ

の一語を本は言ってくれない。

教師の言葉に導かれるものは仕合せだ。その足は神経にくる足踏みの苦しみを知らない。時々道を阻んでたつ壁にがっかりしたとき、どうしたらよいだろう。私はダランベールが年若い数学者たちに忠告していった格言を守った。この偉大なる幾何学者は言った。「自信を持って、そして前に突進しろ」と。

自信は私も持っていた。そして勇気をもって進んだ。それがよかった。壁の前で私の求めている光を私は向こう側でよく見出した。未知のままに残してきたつまづき石を爆破できる爆薬を、石の向こうで拾うこともあった。それは最初たよりない粒であり、転げて大きくなる貧弱な毬だった。定理の傾斜を落ちるこの毬は塊となり、塊は強力な弾丸となり、道を逆にとって後から放てば、闇を打ち破り、そしてそこに光の滝が注がれるのである。

乱用さえしないという条件の下なら、ダランベールの格言の中には、有益なすばらしいものがある。むずかしい本を読むのに急ぎすぎでは、いろいろと思ひ違いが起るだろう。むづかしいところは、見捨てる前に、爪と歯がつぶれるまで立ち向かわなければならない。この荒っぽい劇剣から、知性の力は生まれてくる。

私のこの小さな机を相手としてきた12ヶ月間の思索は、ついに数学士の称号をもたらしした。ここに今、私はあのときから半世紀の後、くもの巣の測量家という非常にためになる職務を果たすことができるようになった。

9. 成功の秘訣 (9巻)

頭にとってまだ完全な眠りではない麻痺状態の中で、その日私がぶつつかって駄目だった数学の難問を解決することがあった。そんな時、私はひと飛びで寝台から降り、ランプをつけ、急いで私の見つけたものを記しておいた。この記憶は一眠りして目の覚めたとき消えているかもしれない。ちょうど嵐のときの稲妻のように、こんな光は現れたときと同じ速さで拭い消されてしまうものだ。その光はどこから来るのだろうか。多分小さいときからできている私の習慣から来るのだろう。精神に絶えず糧を与え、思想の豆ランプに涸れることのない油の滴を注ぐことだ。知力の世界で成功したいと思ったら、間違いのない方法は、いつも考えているということだ。

この方法を私は熱心に実行した。

これはやりきれない苦悩でも、つらい過労でもなかった。反対に、それは美しい詩の響応といってもいい気晴らしだった「光と影」という詩集の中で、われわれの大抒情詩人がそれを言っている。

「数学は科学におけるように、芸術の中にもある。代数は天文学の中にあり、天文学は詩と境を接している。代数は音楽の中にあり、そして音楽は詩と境を接している。」

眠りがやってきても、それはたいていの場合仮眠状態に過ぎず、頭の活動力を停止するどころか、かえってそれを生かし、起きているよりも、もっと活気を与えるのだ。頭にとってはまだ完全な眠りではない私の精神の中に、私がほとんど意識しない極度に明るい灯台ができていたのだ。

10. ミノタウルス (10巻)

書き出しはみつかどせんちこがねの生活誌である。この虫の学名は2つの恐ろしい名前を結び合わせている。ミノタウルスとはそもそも何者か。クレタ島の迷宫の奥殿に置かれ、人肉をもって養われていたミノス王の雄牛のことだ。そしてチファニウスとは天によじ登ろうと企てた大地の子である巨人の一人だ。そしてアテナイ人テセウスはミノス王の娘のアドリアドネに貰った糸球のおかげでミノタウルスの居場所に行き着き、これを殺して難なく脱出し、こうしてこの怪獣の食物に捧げられる恐ろしい貢物から母国を永久に救った。

チファニウスはその積み上げた山々の頂で雷剣に打たれてエトナ火山の中に投げ込まれた。彼はいまだに其処にいるのだ。彼の氣息はこの噴火算の煙となっている。彼が咳をすると溶岩の流れを吐き出し、片方の肩を休めようと担いかえるときシチリヤ島はがらがらとくる。この島を地震で震わすのだ。

島崎藤村学会での挨拶

比治山大学で開催頂き誠に有難うございます。開催校として挨拶せよと宇野先生から頼まれまして、私は工学博士こそ持っておりますが、文学はトンと縁の遠い輩ですから、この際文学的才能を試してやろうとの魂胆かとひそかに憎んでおりました。

文学的では無いかもしれませんが、私はファーブルの昆虫記を読んでおりまして、のろのろと読んでいるものですから、一つには自分の専門と余り関係がないこと、一つには気の向いたときでないと読み始めないこと、読み始めても一気に何ページも進むと言う本でもない。今ようやく10巻に到着しました。

こんな昔話が虫の生活誌の中に出てくるのはなかなか悪くない。もし漠然とした類似が神話と虫の生活にあったら面白い。

ミノス

伝説に従えば神々の王者ゼウスとエウロペとの子。立法者、造船家として名高く、広く海上を支配し、ギリシャ文化に先立ち、クレタ文化を確立した。

かって海神ホセイドンに捧げるため、海から牡牛の出現することを祈願したが、その現るるや姿態の壮美を愛で、海神に奉獻することを止めて、己がものとなしたので、海神の罰を受け、そ

の妃が牛と通じて半人半牛の怪物ミノタウロスを生んだ。ミノスはこの怪物をダイダロスに作らせたラビリント（迷宮）に置き、毎年アテナイの童男童女各7人を犠牲に供した。

王としてその地位をいよいよ光栄あるものとするべく、また地位の安泰その他もろもろの事を海の神ホセイドンに祈った。するとホセイドンは一頭の巨大な美しい牡牛を送り届けてこれを殺して自分に捧げることを命じた。

しかしミノス王はその命令を無視して牡牛を殺さず飼っておいた。ホセイドンは怒って、妃ペシバエにこの牛と通じさせた。こうして上半身は人間だが、下半身は牡牛といった怪物ミノタクロスが生まれたのだという。

ミノス王はこの怪物をダイダロスに迷宮を作って閉じ込めた。

アテナイの重たい運命として、9年ごとに7人の若者と7人の乙女を貢物として、クレタ島に送ることであった。彼らの運命はラビリントスでミノタクロスの餌食となることであった。

テセウスは7人の若者の1人として、進んでクレタ島に向かう。ミノス王の娘アドリアネはテセウスに恋し、糸だまを与える。ミノタクロスを退治したテセウスは糸玉を頼りに迷宮から脱出して、アテナイに帰り母国を救った。

ミノスは、生前立方家と名があったため冥府において裁判官の1人となり、死人を裁くこととなった。